

中学校・高等学校における教師の古典教育意識

—長野県内アンケート調査の結果から—

杉村修一 信州大学教育学研究科

藤森裕治 言語教育講座

キーワード：古典教育，教材重複，「学習の手引き」，学校間意識

1. 目的¹⁾

杉村修一（2004）の調査によれば，平成14年度版中学校国語教科書にある古典教材のうち，63%は高等学校「国語総合」教科書における教材と重複している。また，平成14年度版中学校国語教科書と高等学校「国語総合」（3社分）における「学習の手引き」を内容的に比較すると，中学校では作品全体にかかわる本質的な問いが目立つのに対し，高等学校「国語総合」では本文の一部を取り出した解釈や，文脈把握を問うものが中心である。すなわち，「学習の手引き」においては高等学校より中学校のほうがややもすると高度な内容といえることができる。²⁾

こうした実態にそくして設定した以下の課題を調査・考察することが，小稿の目的である。

- (1) 63%の古典重複教材について，実際に指導に当たっている中学校，高等学校の先生方はこの事実をどう評価しているか。
- (2) 「学習の手引き」の扱いについて，実際に中学校や高等学校の先生方は「学習の手引き」に沿った授業展開をしているのか，それとも生徒の実態に応じて「学習の手引き」を部分的に利用しているのか，または，生徒の実態に応じて「学習の手引き」を使わないで，独自の学習課題を設定して行っているのか。
- (3) 中学校と高等学校の先生方の学校間意識について，中学校の先生方は生徒が高等学校に入った先のことを意識しているか。また，高等学校の先生方は中学校の学習実態を把握し，古典学習の導入に際して中学校の学習過程を意識した授業を行っているか。

2. 方法

(1) 形式と対象

方法は質問紙形式で行った。対象は長野県内に勤務する公・私立の中学校，高等学校の国語科教諭及び国語科担当講師である。（下表参照）

	配布校数	回収学校数	配布国語科人数	回収国語科人数	回収率
中学校	47	37	116	84	72%
高等学校	38	36	236	172	73%

(2) 内容

記述形式の質問では次の三つの質問について回答を求めた（通し番号は質問紙の番号に対応）。

1. 古典の学習指導で特に重視していることは何ですか。
11. 高等学校における古典学習の実態について，特に知りたいことは何ですか。（中学校）
中学校における古典学習の実態について，特に知りたいことは何ですか。（高等学校）
12. 日頃古典教育について感じられていること等がありましたら自由にお書き下さい。

一方、選択肢形式の質問では、以下の質問について回答を求めた。

2. 国語の学習指導の中で、古典の学習についてどのような手応えを持ですか。
 - ア 自信がある。イ 大体自信がある。ウ あまり自信がない。エ 自信がない。
3. 先生のみから見て、生徒は古典学習についてどのような意識を持っていますか。
 - ア 喜んで学習している。イ 抵抗なく学習している。ウ やや苦手としている。エ 苦手としている。
4. 古典学習は基本的にどのような形態で行っていますか。
 - ア 指導者からの講義を中心に行う。
 - イ 学習課題を与えて生徒の発表と教師の問答で行う。
 - ウ 生徒の発表を多く取り入れ教師が補足解説を行う。
 - エ その他 ()
5. 古典学習において教科書の教材をどのように使用していますか。
 - ア 全面的に準拠する。
 - イ おおむね教科書教材を使用するが、補助として自主教材を使用することがある。
 - ウ 教科書教材と自主教材を同等に使用している。
 - エ ほぼ自主教材で行っている。
6. 教科書の「学習の手引き」はどの程度利用していますか。
 - ア すべて利用している。イ 大体利用している。ウ あまり利用していない。エ 全く利用していない。
7. 3年生の授業を行うに当たって、高等学校の古典学習をどの程度配慮していますか。
(高等学校の場合は「1年生の授業を行うに当たって中学校の」)
 - ア 高等学校の学習内容を取り入れた授業を行うようにしている。(高等学校の場合は「中学校」)
 - イ 高等学校での学習内容にある程度心がけた授業をしている。
 - ウ 高等学校の学習内容は気にはなるが、授業等で特に配慮することはない。
 - エ 中学校の内容をきちんと教えることが大切で配慮しない。
 - オ その他 ()
8. 教科書の漢文教材はどの程度取り扱いますか。
 - ア すべて扱う。イ 一部扱わない。ウ 全く扱わない。
 - エ その他 ()
9. 中学校教科書に取り上げられた古典教材のうち63%が高等学校「国語総合」(1年)の古典教材と重複しています。この現状をどう思われますか。
 - ア 中高での重複は避けた方がよい。イ 中高はなるべく重複させてもよい。
 - ウ その他 ()

理由

10. 次の中でこれまでに繰り返し、学習指導した古典作品にすべて○を付けて下さい。
 - ア 竹取物語(冒頭) イ 竹取物語(昇天) ウ 枕草子(春はあけぼの)
 - エ 徒然草(つれづれなるままに) オ 平家物語(祇園精舎の鐘の声)
 - カ 平家物語(敦盛最期) キ おくのほそ道(冒頭) ク おくのほそ道(平泉)
 - ケ 故事成語(矛盾) コ 漢詩杜甫(春望) サ 漢詩李白(黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る)
 - シ 万葉集 山上憶良 銀も金も玉も何せむにまされる宝子にしかめやも

- ス 万葉集 持統天皇 春過ぎて夏来たるらし白妙の衣干したり天の香具山
 セ 万葉集 柿本人麻呂 東の野に炎の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ
 ソ 古今和歌集 藤原敏行 秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬ
 タ 古今和歌集 小野小町 おもひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを
 チ 新古今和歌集 式子内親王 玉の緒よ絶えなば絶えねながらへばしのぶることの弱りもぞする
 ツ その他 ()

3. 調査の結果と分析

1. 古典の学習指導で特に重視していることは何ですか。(記述)

ここでは回答に記されていた内容を以下の五種類に分類し、指導方法の工夫に関するものは「⑥その他」に入れた。

- ①音声言語関係…音読、朗読、暗唱等に関するもの
- ②内容理解関係…本文の解釈等の内容理解に関するもの
- ③文学史・歴史的背景関係…文学史ならびに歴史的背景や有職故実関係のもの
- ④文法事項関係…歴史的仮名遣いと表現技法を含む、文法に関するもの。
- ⑤応用発展…創作、発表等学習、心情把握、主題把握等が応用発展しているもの。
- ⑥その他…(「関心・意欲・態度」含む)

(複数にわたって言及した回答は重複して数えている)

	①音声言語	②内容理解	③文学史・歴史	④文法事項	⑤応用発展	⑥その他
中学校	63(75%)	24(29%)	16(19%)	26(31%)	10(12%)	13(15%)
高等学校	44(26%)	76(44%)	32(19%)	57(33%)	49(29%)	35(20%)

中学校の結果を見ると、①音声言語(音読、朗読、暗唱)に関する指導が他のいずれの指導より重視されていると考えられる³⁾。④文法事項のほとんどは歴史的仮名遣いに関するものであり、⑥その他は、生徒が嫌いにならないように楽しい授業を心がけているという回答が多くを占める。

一方高等学校では②内容理解が中心であり、続いて④文法事項、⑤応用発展となっている。高等学校でも⑥その他は古典嫌いにならないようにという配慮が多くを占める。

2. 国語学習の中で、古典の学習についてどのような手応えをお持ちですか⁴⁾

	ア自信ある	イ大体ある	ウあまりない	エ自信がない
中学校	4(5%)	39(46%)	36(43%)	5(6%)
高等学校	10(6%)	81(47%)	66(39%)	11(6%)

古典学習指導の手応えであるが、中学校・高等学校ともに、ア自信がある・イ大体自信があるの回答と、ウ自信があまりない・エ自信がないの回答とは拮抗しており、ほぼ同じ傾向にある。

3. 先生目から見て、生徒は古典学習についてどのような意識を持っていますか。

	ア喜んで学習している	イ抵抗なく学習している	ウやや苦手としている	エ苦手としている
中学校	10(12%)	19(23%)	51(61%)	8(10%)
高等学校	4(23%)	24(14%)	96(56%)	59(34%)

中学校・高等学校ともに、多くの先生方は古典学習は苦手と見ている。

4. 古典学習は基本的にどのような形態で行っていますか。

	ア 講義	イ 発表と問答	ウ 発表と補足	エ その他
中学校	32(38%)	38(45%)	15(18%)	9(11%)
高等学校	121(71%)	52(30%)	6(4%)	6(4%)

中学校では、イ発表と問答とア講義で古典学習をしている先生が多く、ウ発表と補足の先生も少なからずいらっしゃる。高等学校では圧倒的にア講義の授業形態が多いのが特徴となっており、続いて問答形式となっている。

5. 古典学習において教科書の教材をどのように使用していますか

	ア 全面的	イ 教科書と補助教材	ウ 同等	エ 自主教材
中学校	31(37%)	54(64%)	3(4%)	1(1%)
高等学校	61(36%)	104(61%)	5(3%)	5(3%)

中学校でも高等学校でも、教科書の教材に補助教材を併用しているのが特徴である。

6. 教科書の「学習の手引き」はどの程度使用していますか

	アすべて使用する	イ大体使用する	ウあまり使用しない	エ全く使用しない
中学校	1(1%)	36(43%)	39(46%)	7(8%)
高等学校	9(5%)	88(52%)	63(37%)	10(6%)

中学校では、イ大体使用するとウあまり使用しないが同等であるが、高等学校ではイの大体使用するがウあまり使用しないを上回ると考えられる⁵⁾。

7. 中学校3年生の授業を行うに当たって高等学校の古典学習をどの程度配慮していますか

(国語総合1年生の授業を行うに当たって中学校の古典学習をどの程度配慮していますか)

	ア 取り入れる	イ 心がける	ウ 気にはするが配慮しない	エ 全く配慮しない	オ その他
中学校	4(5%)	20(24%)	35(42%)	15(18%)	6(7%)
高等学校	4(2%)	57(33%)	75(44%)	21(12%)	13(8%)

中学校と高等学校の学校間意識についての質問だが、中学校、高等学校ともにほぼ同様の回答結果となった。「ア取り入れる」「イ心がける」と「ウ気にはするが配慮しない」「エ配慮しない」とをそれぞれ「配慮する回答」と「配慮しない回答」に大別すると、中学校、高等学校ともに「配慮しない回答」が多い⁶⁾。

8. 教科書の漢文教材はどの程度取り扱いますか

	ア すべて	イ 一部取り扱わない	ウ 全く取り扱わない	エ その他
中学校	76(90%)	7(8%)	1(1%)	1(1%)
高等学校	9(5%)	157(92%)	2(1%)	4(2%)

9. 中学校教科書に取り上げられた古典教材のうち63%が高等学校「国語総合」と重複しています。この現状をどう思われますか?

	ア 避けるべき	イ 重複させてもよい	ウ その他
中学校	29(35%)	36(43%)	17(20%)
高等学校	82(48%)	47(27%)	41(24%)

中学校においては「ア重複をさけるべき」と「イ重複させてもよい」との両方の回答に分かれる。このうち、「ア重複をさけるべき」の主な理由は「幅広く古典作品に触れさせたい」というものであり、また、「イ重複させてもよい」の主な理由は「親しみを持って高校の古典学習の導入に入れる」、「中学校と高等学校では扱い方が違うので問題ない」等であった。「ウその他」の主な理由は「高等学校の学習内容がわからないため、なんとも言えない」と「重複すること自体はよいと考えるが、教科書で63%の重複は多すぎるのではないか」といった疑問であった。

高等学校は中学校とは異なり、「ア重複をさけるべき」という意見が「イ重複させてもよい」より多いと考えられる。 「ア重複をさけるべき」の理由として代表的なものは、中学校と同じく「幅広く古典作品に触れさせたい」である。これに加え、「中学校でやってあるので、新鮮味に欠けるから」という理由が目立つ。「イ重複させてもよい」の主な理由は、中学校と同じく「親しみを持って高校の古典学習の導入に入れる」「中学校と高等学校では扱い方が違うので問題ない」等であった。「親しみを持って高校の古典学習の導入に入れる」については中・高間の連携をふまえた考え方と見ることができるが、「中学校と高等学校では扱い方が違うので問題ない」という回答は中学校とのつながりを考えていないように思われる。「ウその他」の主な理由は「どちらでもかまわない」が主な理由であった。

10. 次の中でこれまでに繰り返し、学習した古典作品にすべて○を付けて下さい。

	ア竹取(冒頭)	イ竹取(昇天)	ウ枕草子(春は)	エ徒然草(冒頭)	オ平家(冒頭)
中学校	78(93%)	31(37%)	79(94%)	56(67%)	65(77%)
高等学校	129(75%)	80(47%)	136(80%)	141(83%)	105(61%)

	カ平家(敦盛)	キおくのほそ道(冒頭)	クおくのほそ道(平泉)	ケ矛盾	コ春望
中学校	12(14%)	73(87%)	61(73%)	78(93%)	48(57%)
高等学校	41(24%)	112(66%)	87(51%)	116(68%)	121(71%)

	サ黄鶴楼	シ銀も金も	ス春過ぎて	セ東の野	ソ秋来ぬ
中学校	71(85%)	56(67%)	69(79%)	66(79%)	38(45%)
高等学校	101(59%)	64(37%)	63(37%)	51(30%)	80(47%)

	タ思ひつつ	チ玉の緒よ
中学校	59(70%)	46(55%)
高等学校	67(39%)	56(33%)

ここに挙げた17教材は杉村(2004)の調査の中で、中・高の教科書間の重複度が50%を越えるものである。この中で実際に中学校、高等学校の先生が何度も繰り返し学習した教材として、「竹取物語の冒頭」、「枕草子の冒頭」、「平家物語の冒頭」「徒然草の冒頭」を挙げることができる。これら四つの教材は中学校、高等学校で重複する教材であり、特に「竹取物語の冒頭」と「枕草子の冒頭」は、双方の学校間で重複する度合いがきわめて高いと言えよう。

11 高等学校の古典の実態について知りたいこと。(中学校の古典の実態について知りたいこと)
 中学校の先生方が高等学校の古典実態について知りたいことは、主として次の四つである。

- ・中学校でやっておくこととやってはならないこと
- ・どのような教材でどのような指導法で授業がなされているのか
- ・高校での古典文法はどの程度行うのか
- ・高校での古典学習の目的

一方、高等学校の先生方が中学校の古典学習の実態について知りたいことは、

- ・どのような教材をどの程度の内容まで教えているのか
- ・古典文法の取扱について

の二つが群を抜いて多く、つづいて指導形態や口語文法の指導内容が多かった。このことから、中学校の先生方も高等学校の先生方も高等学校や中学校の学習指導の実態について、ほとんど知らないと見ることができるが、これは質問7の結果を裏付けるものとなっている。

12 日頃古典教育について感じられていること等がありましたら自由にお書き下さい。

中学校では次の5点が多く挙げられた。

- ・生徒に興味を持たせる授業の工夫を考えている。
- ・古典学習の時間がとれなくなっていることを憂慮している。
- ・読むことができても、理解までには至っていないという悩み。
- ・古典学習の動機づけとして、テストに出るからという理由で取り組む生徒が多い。
- ・古典の持つリズム、流れるような日本語の美しさを学習させたい。

である。一方高等学校では

- ・もっと数多くの作品に触れたり、ひとつの作品を読み通す授業がしたい。
- ・古典の時間数削減への憂慮。
- ・古典文法やそれに基づいた現代語訳で終わる授業が本当に有効か疑問である。(訳がゴールになっている)
- ・文法にこだわりすぎている。
- ・古典文法がわからなければ本文理解が成り立たない。
- ・古典文法で古典嫌いになる生徒が多い。
- ・古典を学ぶ楽しさや意義について一部生徒に伝わらない。
- ・古典教育について中高での連携を論じる機会が少ない。
- ・生徒に興味を持たせる授業の工夫を考えている。
- ・生徒に自主的に古典学習に取り組ませる方法を考えている。

など、大学受験が足かせとなって、自分が考えているような授業の取り組みができていない現状や、古典文法の扱いについての悩み等が多い。また、中学校の先生と同じ悩みとして、「生徒に興味を持たせる授業の工夫を考えている」「古典の時間数削減への憂慮」が挙げられる。

高等学校独自なものとしては、「古典教育について中高での連携を論じる機会が少ない」「生徒に自主的に古典学習に取り組ませる方法を考えている」等の回答があり、これからの高等学校での古典教育の在り方を考えるに当たって重要な示唆と考えられる。

4. 考察

4.1 教科書教材の重複

中学校と高等学校の先生方に、教材の重複に関しては意識のずれがあることがわかった。具体的に言うと中学校の先生方は、「ア重複をさけるべき」という意識と「イ重複させてもよい」意識が大体半々である。一方、高等学校の先生方は「イ重複させてもよい」より「ア重複をさけるべき」と考える先生が多い傾向にある。つまり、古典教材の重複に関して、中学校の先生方が賛否両論であるのに対し、高等学校の先生方は重複を避けるべきに偏っているのである。

回答結果にこのような傾向が現れる要因として、例えば以下のものが挙げられる。

- ①中学校の先生方にとって、この質問は中学校にとっての場合と、高等学校にとっての場合と二方面から考えての回答であるのに対し、高等学校の先生方は高等学校にとっての場合だけの考えであること。そのため、中学校の先生方で高等学校への接続に、さして問題意識を感じない方にとっては、教材の重複がもたらす弊害を認識する余地がなかったと考えられる。
- ②理由のコメントに、高等学校の先生だけに見られる「中学校でやってあるので、新鮮味に欠けるから」というコメントがある。実際に重複教材は生徒や先生のモチベーションが下がってしまうことの実体験からきているものと考えられるが、その背後には古典に対する苦手意識が先生方にもあるように思われる。
- ③中学校での学習内容として、古典の比重がごく軽いものであり、仮に教材が高等学校と重複しても、それによる弊害をもたらすまで考えない方が、中学校に相当数おられる可能性も考えられる。

4.2 教科書の「学習の手引き」

回答結果で見たように、中学校の半分の先生方は「学習の手引き」を使用し、半分の先生方は使用しないと答えている。これに対して、高等学校では「学習の手引き」を使用する先生が使用しない先生より有意に多い傾向であることがわかった。

一般に、高等学校よりも義務教育の先生方のほうが学習指導要領や教科書への準拠性を高く意識しているといわれる。とすれば、中学校の先生方は教科書の「学習の手引き」を積極的に利用して当然である。しかるに、なぜ使用する先生と使用しない先生が半々なのであろうか。その要因として考えられることは以下のとおりである。

- ①教科書における「学習の手引き」のうち、中学校の「学習の手引き」は内容理解より応用発展が多く、ややもすれば高等学校より高度な内容なものがある。このことから中学校の先生方にとっては、取り扱いをもてあますような手引きが教科書にあるのではないかと考えられる。
- ②古典学習で重視していることについて尋ねた記述質問1と教科書における「学習の手引き」とを比較してみると表1・2のようになる。これを見ると、中学校で先生方が重視している学習指導は、①音声言語（音読、朗読、暗唱）に関する指導であるが、中学校教科書の「学習の手引き」では、圧倒的に⑤応用発展②内容理解の数が多く、続いて①音声言語④文法事項③文学史・歴史的背景と続いている。高等学校では②内容理解が古典学習で重視している中心であるが、高等学校教科書の「学習の手引き」も②内容理解が圧倒的に多く、続いて⑤応用発展④文法事項③文学史・歴史的背景①音声言語となっている。このことから中学校の先生方の古典の学習指導の重点と「学習の手引き」には大きな隔たりがあるが、高等学校では先生方の古典の学習指導の重点である「内容理解」が一致していることが注目される。

表1：「古典の学習指導で特に重視していることは何ですか。」の回答類型

	①音声言語	②内容理解	③文学史・歴史	④文法事項	⑤応用発展	⑥その他
中学校	63 (75 %)	24 (29 %)	16 (19 %)	26 (31 %)	10 (12 %)	13 (15 %)
高等学校	44 (26 %)	76 (44 %)	32 (19 %)	57 (33 %)	49 (29 %)	35 (20 %)

表2：教科書における「学習の手引き」（数値は古文漢文の総和。重複あり）

	総数	①音声言語	②内容理解	③文学史・歴史	④文法事項	⑤応用発展
中学校	247	62 (25 %)	128 (52 %)	18 (7 %)	30 (12 %)	142 (57 %)
高等学校	669	42 (6 %)	478 (71 %)	42 (6 %)	148 (22 %)	266 (40 %)

4.3 古典学習意識と学校間意識

ア 古典学習意識

中学校の先生方は「音声言語（音読、朗読、暗唱）」に関する指導に重点を置き、「発表と問答」と「講義」という学習形態で、教科書教材に補助教材を併用して授業を行っている。一方高等学校の先生方は内容理解が古典学習の重点と考えて、「講義」という学習形態で、教科書教材に補助教材を併用して授業を行っていると見ることができる。このような傾向となる要因として考えられることは以下のとおりである。

- ①学習目標の重点の違いが考えられる。中学校では、中学校の学習指導要領「第三 指導計画の作成と内容の取扱い（4）イ」にあたる古典指導についての内容に従っての指導であり、高等学校では文法等をふまえた訓詁注釈を中心に内容を理解させるに適した授業形態として「講義」形態がとられていると考えられる。
- ②教育課程の違いが考えられる。中学校ではあくまで、古典学習は教科書の一単元にすぎないが、高等学校ではカリキュラムに古典として組み込まれ、通年を通して学習する。そのため、中学校三年間で取り上げられる教科書の古典教材は、各出版会社で平均 33.4 教材に対し、高等学校では「国語総合」だけで各出版会社平均 62.0 教材ある。また、中学校では時間の制約（1年 140 時間、2年・3年各 105 時間）もあり、学習指導要領の指導目標に近づけるには音声言語中心の発表と問答形態の授業が多いのではないかと考えられる。
- ③多くの高等学校の生徒は、大学及び短大志望である。中でもとりわけ多いのが文化系への進路希望である。そのため、古典学習に際して、受験でテストの点数をとることの方を文学のおもしろみや深さを理解することより優先する傾向がある。テストで点を取るにはまさしく文法を加味した「講義」形態の授業の方が一見早道のように考えることは当然である。
- ④受験の影響は高校入試でも同様である。長野県では古文の出題が続いており、中学校の古典教育の中でも高校入試の問題を解くための授業を展開しなくてはならない現状にある。中学校でも「講義」で授業を進めるとい回答が目立ったのは、こうした事情もあるのではないかと考えられる。
- ⑤先生方の大学時代の専門を考える時、中学校の先生方は教育学部出身の先生方が多く、高等学校では反対に文学部出身の先生方がほとんどで、教育学部出身者は少数である。文学部では教育学部ほど学習指導の方法について学ぶ機会はなく、自ら高校生時代に受けた授業は「講義」形態しか記憶にない。こうした現実から自分が教わったやり方と同じ授業を行っていることが考えられる。

イ 学校間意識について

学校間意識については、中学校、高等学校ともにあまり意識されていないという傾向にあることが明らかになった。その要因として考えられることは以下のとおりである。

- ①中学校、高等学校ともに、自分の属する学校での教育内容を指導すればよいと考えて授業しても、通常は差し支えない現状にある。そのため、学校間意識を持つことの必要感がないと思われる。
- ②高等学校の場合は、今回の学習指導要領の改訂にともない、初めて小中高のつながりを意識した「国語総合」という科目が成立した。これは、中学校の学習をふまえた指導に力点が置かれた科目だが、こうした行政的改革が示されること自体、今までこのような連続したつながりが実質をともなったものではなかったことを示唆している。高等学校の先生方には、中学校の学習を受けての学習の構築という意識が、中学校では高等学校を見据えた指導を行うという意識が、すべての教育活動において十分に醸成されていないと思われる。
- ③人事交流という面でも考えられる。採用試験から義務教育と高校教育に分けられての採用であり、しかも、小中人事は日常茶飯事に行われているが、中高交流人事は行われてはいるものの、年間数組程度のものであり、圧倒的に数が少ない。よって、互いの理解不足はどうしても起こり得ることである。
- ④研究会の面でもそうである。小中の先生方は郡市町村単位での採用で研究同好会も存在し、交流を深めている。高等学校では「長野県国語国文学会」が全県で一つの研究組織であり、対象は高等学校、短期大学、大学の先生方である。このような研究会においても学校間意識はされていない状況である。数少ない中高交流ができていのは組合主催の教育研究集会であり、公的な機関においては県教育センター主催の講座「中高連携の国語」のみである。研究会機会のあらゆる面で中高交流はなされておらず、大きな課題の一つと考えられる。

5. 展望

5.1. 本調査と全国調査との関係

冒頭で述べたように、小稿で実施した調査は、長野県下の中学・高校に勤務される先生方だけを対象にしたものである。そのため、この調査結果からただちに一般的な傾向を導き出すことはできない。すなわち、本調査と同趣旨で行われた全国規模の調査研究との比較が必要になるのである。

近年、全国規模で行われた学校教育の実態調査研究としては、国立教育政策研究所による小学校・中学校教育課程実施状況調査(平成13年度)、及び高等学校教育課程実施状況調査(平成14年度)がある。この調査は、平成元年度学習指導要領における教育課程の実現状況について、3万～4万人規模の児童・生徒及びその指導教諭を対象に、質問紙と試験問題とによって調べたものである。調査の趣旨は小稿のそれと異なるが、対象となった教師・生徒の規模や調査内容等から見て、小稿の結果と比較することの意義は決して低くないと思われる。

そこで、上に挙げた二つの全国調査(以下教育課程調査とする)の結果をもとに、小稿での調査と比較し得る問題について議論することとしたい。

(1) 音読・朗読指導の重視

既に述べたように、調査に回答した中学校の先生方は、古典の学習指導で音読、朗読、暗唱の学習を最も重視していると思われる。この傾向は、教育課程調査における次表の調査結果と整合するものと言えよう。ただし、この活動に対する生徒の反応(自由記入)を見ると、好きだったとする者と嫌いだったとするものが同程度おり、音読・朗読をすることが古典作品への関心・意欲につながるとは、

必ずしも言えない結果となっている。

生徒・教師質問紙：音読や朗読をすること（高校は質問項目になし）

（単位％）

学年	生徒の回答		教師の回答	
	好きだった	きらいだった	指導している	指導していない
中1	36.6	38.1	99.8	0.2
中2	33.5	38.9	99.7	0.3
中3	35.2	38.1	99.9	0.1

（2）課題追求型学習の扱い

実際の古典学習に際して、回答した中学校の先生方が最も多く採用しているのは発表・問答の学習である。すなわち、生徒に何らかの課題を与え、その解決を求めながら学習を進めたり、問答を展開して知識の定着をはかっているわけである。これに対して、高等学校の先生方は内容理解が古典学習の重点と考え、「講義」という学習形態を中心に授業を行っていると見ることができる。

こうした状況は、下表に示す教育課程調査の結果にも現れている。「課題解決的な学習を取り入れた授業を行っていますか」の問いについて、回答した中学校教師は約半数がこれを取り入れているのに対し、高校では37％程度にとどまっている。

教師質問紙：課題解決的な学習を取り入れた授業を行っていますか。

（単位％）

学年	行っている方だ	どちらかといえば行っている方だ	どちらかといえば行っていない方だ	行っていない方だ	無回答
中1	14.0	37.2	37.3	11.0	0.6
中2	11.3	36.0	40.0	11.8	0.9
中3	14.3	35.3	37.7	12.0	0.6
高校	9.5	26.2	35.2	28.3	0.9

高等学校教育課程調査で行われたペーパーテストでは、古文・漢文ともに、文章の主題をふまえて自分の考えを深めたりまとめたりする問題が出されている。ところが、その通過率（正答・純正答とみなされた解答比率）は、古文で41.3％（設定通過率50％）、漢文では27.1％（設定通過率50％）と、いずれも期待値を下回る結果となっている。古文・漢文の内容理解を問う他の問題では設定通過率を上回るか同等の結果を得ていることから、読解能力はある程度育成されていると思われるにもかかわらず、上記の問題のみこうした結果となった要因はどこにあるだろうか。

（3）受験の問題と生徒の意識

前項で提起した問題について、直観的に想起されるのは受験と古典学習との関連である。4.考察において述べたように、高校では古典に関する知識量が文科系大学の受験に影響を与えると考える傾向があり、いきおい古典文法の学習に力が入ると考えられる。このような価値観からすれば、作品の内容や主題に関して自分の考えをまとめたり深めたりする経験を取り入れた古典学習は、ほとんど顧慮されないと思われる。その結果、これらを問う設問の通過率が低くなったと解釈できるわけである。

しかしながら、教育課程調査における国語の学習と受験との関連については、次表に見られるようにこの解釈に反するやや意外な結果が出ている。すなわち、入学試験に役立つことを目的として国語を学びたいとする考えは、高校生より中学生のほうが高く、中学3年生が77.1％（「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の和）と最も高い結果となっているのである。もとより、高校受験では古

典の問題を課さない自治体も多く、中学生の回答結果が小稿の問題関心に直接反映されるわけではないが、少なくとも受験対策を第一義とする高校古典の授業は、見直しが迫られる結果と言えよう。

教師質問紙：受験(入試・就職試験)に役立つよう国語を勉強したい。(単位%)

回答 学年	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない	わからない	無回答
中1	32.5	37.3	13.8	7.1	8.5	0.6
中2	37.5	37.8	11.3	7.3	6.2	0.9
中3	42.5	34.6	10.4	6.4	4.4	0.6
高校	27.2	28.1	17.4	20.8	6.2	0.3

5.2. 中学校・高等学校間連携のアポリア

今回の調査結果は、これまで経験的には指摘されていた中学校と高等学校との古典学習に対する意識の懸隔が、改めて明確化されたように思われる。端的に言えば、中学校の先生方は教科書に沿って音読・朗読を中心に興味・関心の啓発を大切にした指導を心がけており、高等学校の先生方は教科書に沿って内容理解を中心に講義形式の指導を展開しているのである。その際、教科書における教材の重複について、中学校の先生方は高等学校の先生方ほど問題視はしていないことが明らかになった。また、「学習の手引き」の難易度における中・高の逆転現象については、中学校の先生方がこうした手引きを選択的に活用することで対応していることが示唆されている。つまり、高等学校で現代文と同等のウエイトとなる古典分野は、中学校の先生方にとっては名実ともに、興味・関心を持たせることが最優先の、国語科における一単元にすぎないと考えられるのである。

このような実態を見ると、近年各方面で取り組みがなされている中学校と高等学校との教科間連携について、いくつかの難問を指摘せざるを得ない。

その第一は、教育課程の上からも取り扱いに大きな格差の見られる古典を、中学校から高等学校へとスムーズに展開させる指導方法が、現実的にあるかという問題である。中高一貫校などのように、制度的に中・高のスムーズな連携を可能にする現場もあるには違いない。しかし、現状では、大半の中学生は高校を受験し、地域にある複数の学校に散ってゆく。その際、仮にもとの中学校とA高校とが緊密な教科間連携をなし得ていても、この恩恵に浴し得るのは一部に限られる。

第二は、教科書の編集と採択の問題である。本調査における質問5.で見たように、古典学習の教材は、教科書に依拠する率がきわめて高い。しかし、教材の重複率からうかがわれるように、中学校と高等学校との間では、教科書編集における情報交換が概して稀薄である。これに加え、教科書採択の方式も、中学校と高等学校とでは全く異なっている。すなわち、中学校は所轄の教育委員会単位で教科書採択がなされるのに対し、高等学校は基本的に各学校の担当教員が選ぶことになっている。このため、教材自体が中・高の連続性を視野に入れにくいのである。

第三は、これらの問題があるにもかかわらず、さしあたり中学校も高等学校も、それぞれの学校に特化した教科教育を、不都合を感じることなく進めているという現実である。本調査に際して、稿者らは学校間連携への切実な願いや期待を寄せる回答が一定量見られるのではないかと予想していた。しかし、回答者のほとんどは、易きに甘んじてはならないが喫緊に他校種との連携を模索する必要を覚えるには至らない、という意識であったように思われる。

5.3.今後への視座

以上の問題をふまえ、なおかつこれからの中・高連携を見据えた古典教育を展望するならば、いかなる視座が求められるだろうか。この問題については今後さらに実証的・実践的な研究を進める必要があるが、現時点での覚え書きを以下に記して結びとしたい。

(1) 情報交流の必要性

本調査によれば、教師の古典教育意識を議論する前に、中学校と高等学校との情報交流の活性化が急務の課題に思われる。質問 11. で見たように、先生方は他校種の実態として知りたい情報をいくつも指摘している。このことを裏返せば、現時点ではこうした基本的な情報すら把握されていないことを意味する。教員レベルでの交流はもちろんだが、校務に追われる日々にあっても得るべき情報は確実に交流できるような制度と組織づくりが肝要となろう。

(2) 教科書中心主義の見直し

教材の重複率が 63 % であることについて、高等学校の先生方からは懸念する回答が多く寄せられた。これをふまえるならば、中学校及び高等学校入門期に扱う教材について、教科書だけにとらわれることが適切とはいえない。「竹取物語」や「徒然草」の冒頭のような基本教材は重視しなければなるまいが、例えば物語性や展開に富んだ近世の作品などを発掘することがあってよいと思われる。

(3) 古典至上主義の問い直し

4. 考察で述べたように、高等学校の国語科教師は、多くが文学部出身である。そのうち古典文学を専攻してきた教師の中には、いまだに「私は古典が専門ですから」と言って憚らぬ人もいる。古典を独自の分野・単元とせず、現代に通じる視点から再構成する試みが中・高それぞれにあってよいと思われる。そしてその成果を(1)で述べたように交流しあうのである。

(4) 生徒の学び方における中・高連携の可能性

中学校から高等学校へと進んだ生徒は、それぞれの学校でさまざまなスタイルの授業と出会うことになる。そこにおいて普遍的で万能な教授の在り方など、おそらくないであろう。しかし、古典を教材としてこれを読み、味わい、想をめぐらすいとなみ自体は、当該生徒の「学び」における普遍の姿である。授業のスタイルや約束事は、彼らの普遍性を養成し支援するための制度であり、究極的にはどこでどのような授業を受けても原点としての学び方が個々の生徒に育まれればよいと考える。その意味で、古典教育は教え方の開発から学び方の探求へと、その視座を転換する時期に来ているのではなかろうか。

1) 小稿は杉村と藤森の協同研究によるものであるが、本文は 1.~4. を杉村が、5. を藤森がそれぞれ執筆した。

2) 2004 年 2 月 20 日開催の四大学国語教育合同研究発表会（東京国立オリンピックセンター）における研究発表による。

3) $\chi^2_{(3)} = 74.81, p < .01$ となり、ライアンの名義水準を用いた多重比較をすると他のいずれより有意に多い。

4) 選択肢の質問は特に断りのない限り一つを選ぶように求めたが、回答者によっては無回答であったり意図的に重複したりしているため、回答者数と回答数の和は必ずしも一致しない。

5) ア・イとウ・エの度数をそれぞれ統合して検定にかけた結果、 $\chi^2_{(1)} = 3.38, .05 < p < .10$ となった。

6) 中学校は $\chi^2_{(1)} = 9.13, p < .01$ 、高等学校は $\chi^2_{(1)} = 7.80, p < .01$

7) $\chi^2_{(1)} = 9.49, p < .01$

8) 国立教育政策研究所 (<http://www.nier.go.jp/homepage/kyoutsuu/frame04.html>) による。